

総合討論

野間：それではこれから総合討論に入ります。まずフロアの方から個別の質問等を受けたいと思います。

藤田裕嗣(神戸大)：橋本先生のご報告で、表1に書いてある並びの中で、何によって「河成」自体の認定と、それが減免されるかどうか、非常に大事ということはよくわかります。しかし、その証明が何によってできるのか。認定の有無が最初にあって、認定はされたけれども算用状では結局減免されなかったという論理なのかがよくわかりませんでした。とても大事だと思うので、そこを説明していただきたいと思います。また、地域資源は、魚ではないかということだったと思うのですが、支配者としてどうして売買が確認できるのか？これは歴史学をやる者としてはとても重要な論点ですので悩むところです。これは流通ということとも関わりますので、当時は何を欲しているのかということと関わるわけです。琵琶湖圏と比べて、ここは海もありますので、かなり論理が違ってくる。その議論がないと、単純に言えないことなのではないかと思いますので、その点を質問させていただきます。

橋本：まず、ご質問の第1点目ですが、「河成」に認定されても実際は減免されていないのはどういうことか、正確に言うと、河成と認定されたのに減免されてない場合がかなりあった、ということ今回初めて論証できたということなのです。例えば貞和5年だったと思いますが、河成もあって、内検帳も作られているにも関わらず、却下される。ただ、全てそうだったわけではなく、1件1件厳密にそれを確認していかなければならないと考

えています。河成を単純に、気候変動のデータと合わせて議論することはできないだろう、というのが私の考えたことです。ですので、河成の認定有無ということで、今回40件検出することができたのですが、もう一度きちんと言直して、実際にどうだったのか、申請は30石でされていたけれども、ネゴシエーションによって、実際には15石しか減免されなかった。その時に、洪水にあった面積と河成認定の面積と、実際に減額された石高と比較して正確な数値を今後検出していきたいと思っています。

ご質問の2点目、魚類の問題は確かに琵琶湖と相生市とは違います。私も聞き取り調査で、原則として相生市で販売されている魚は海産魚に限られていて、淡水魚は市場に乗っていないということを確認してきました。ですので、琵琶湖と同じように淡水魚が百姓等にとっての資源であると短絡的に言ってよいのかどうかということについては、厳密な論証が必要かと思いますが、少なくともその日の暮らしのための資源として、淡水魚も想定してもよいのではないかと、ということ前提に考えてみたいと思っています。

野間：では、全体の質疑に移りたいと思います。福島大学つくしま未来支援センターの高木先生からご質問とご意見が来ておりますので、まずそのご質問をお願いいたします。

高木 享(福島大)：私はもともと、地域活性化の仕事をしてきました。「地域資源」という言葉は、地域活性化の取り組み、現場の中から出てきた話でした。地域にある色々なものを探して、それを地域の誇りとして活かしていく、その原資が「地域資源」であるとい

う解釈で考えてきました。まず、今回の議論でそもそもなぜ、地理学会の中で、「地域資源」という言葉を扱うようになったのか、なぜ、扱わなければいけなかったのか、というところを是非、お話を聞きたいと思います。なぜかと申しますと、私が2000年半ばくらいに活性化の仕事をしている時に、地理学会の中で「地域資源」という言葉を使うことが憚られた時期があったからです。そのような中で、「地域資源」という言葉が前面に出て、学会のシンポジウムに取りあげられること自体、非常に変わったなと思いましたので、まずそのことについてのお話をうかがいたいと思います。

湯澤：私自身がこのシンポジウムの提案者でもあるのですが、やはりフィールドを歩いていると、現場の方がそういう感覚が早くて、学会の方が遅れているのではないかという気持ち募っていました。かつ「地域資源」という言葉を学会などアカデミックな場で使おうとすると、今までの所謂「資源論」のしがらみから脱却も整理もされないまま、かつての「資源」と連続した形で議論が進んでしまうこともありました。そこを現場に伝える形で、学会としても何か応答をする必要があるのではないかと考え、このテーマを設定しました。加えて、他の学会の動向を見ましても、地理学会よりも早く、歴史学や環境史をはじめ、様々な分野で「地域資源」が議論される中で、これから「地域」を見て行かなければならないのに、どうして「地域資源とは何か」ということを地理学会が発信しないのか、という意見もありました。そう考えた時に、ここで多様な発表をもとに「地域資源」をあらためて考えてみたいという趣旨でこのシンポジウムを準備いたしました。

野間：私の方からも申し上げます。はじめ、どうするかという時に、「資源の歴史地理」という話もあったと思うのです。それを相談した中で「地域」というものを私もかなり強

く主張したという記憶があります。人類学や社会学などでも所謂「資源」を扱った著書が出ていますし、地理学でも『ネイチャー&ソサエティ』などの叢書でも自然というものをもう一回見直そうという動きもあります。その時に「地域」というものがどう関わってくるか、というところもこのシンポジウムを今回開く契機となったのではないかと考えております。

高木：現場に入って活性化の仕事をする中で、地域の「お宝」探しということがありますが、これは今までやってきた地域の特徴とどのような違いがあるのだろう、「地域資源」を語る中で、なぜわざわざ「地域資源」という言葉を使わなければならないのか、われわれ地理には「地域性」という言葉があるのではないかと、ということがありました。その点に関して皆さんがどのように考えているかということを知りたいと思います。私自身は、使う人が地域性を見て「これが資源」として使えると思った段階で「地域資源」に変っていくのではないかとこの考え方をもち、色々な所でしゃべっているのですが、是非みなさんのご意見を伺いたいと思っております。

須山：普通に資源というと、鉄鉱石や石灰岩や、そこから取り出しても性質が変わらないものを意味すると思います。今日の話にあった「地域資源」というのは、どれもその場所から切り離すと意味をなさなくなるものなのではないかと思っています。これは湯澤さんの趣旨説明にもあったことだと思うのです。地域性と地域資源はそういう意味では本質的な意味は変わらないという高木先生のご指摘は、その通りです。資源と言いつ換える場合、地域性に結局どのような要素が組み込まれるかということ、私は「有用性」ということなのではないか、と思います。様々な地域性がある中で、私たちの生活をこれから豊かにしていくとか、人を呼ぶとか、あるいは環境を改善す

るとか、そういうことに資するものに「資源」が位置づけられるのではと、ご質問を受けてあらためて考えたところです。

湯澤：1点だけ補足させていただきます。私たちは事前に研究会をしました。そこでは、今回歴史の分野から先生をお2人お招きしたということで、歴史学と地理学の対話ということにもなりました。その時に「地域」というのは地理の中ではしばしば「地域性」や「地域的特徴」として使うのですが、「地域」とは何かという問いはあまりみられない。歴史学ではもう少し政治的な‘National’と‘Local’、「国」と「地域」というような、対立関係の中で、さきほど「せめぎ合い」という言葉や「権力」、「対立」という言葉が出てきましたけれども、そういうことを含みこんで、積極的に「地域」を意味付け考えている。「地域」という概念を使うからこそ、そういうところまで踏み込めるといふ議論にもなりました。ただし、今回は「地域とは何か」という話も含めると、「資源とは何か」という話と重なってしまうので、深くは踏み込みませんでした。今回、歴史学との対話をする中で、地理学としても政治性や権力関係などを含みこんだ議論をしていくことができるのではないかと考えました。

橋本：私は歴史学の立場から今回参加させていただいたのですが、歴史学はこれまでも国家を相対化するものとして「地域」というものを設定してきました。それについてLocalあるいはその国家を超える「地域」というものを設定して議論を組み立ててきました。しかし、いまもう一度「地域」について考えてみるべきではないか。私は職場が理系の職場でして、環境史というものを志しているのですが、その中で近年は「地域環境史」というものを打ち出そうとしています。やはりこれからは、文系の学問だけではなくて、例えば生態学的な条件を組み込んだ、新しい地域というものを設定して、そしてあらためて「地

域」あるいは「地域資源」というものを再検討していくということには意義があると思って、今回この企画に参加させていただきました。

元木：私はこのテーマをお聞きした時に、高木先生がおっしゃられたように、「なぜ今、地域資源なのか」、という問いは当然出てくることだろうと思っていました。その時に、例えば日本の国だけでなく、海外でも近代化路線を目指して、ある1つの目標に向けてみんなが同じように動いていく。そうすると「全体性」というものが出てくる。ところがそのマイナス面というものもどんどん現れてきて、日本の今の地方創生のような動きとなってくる。

つまり、「なぜ、いま地域資源なのか」は、世界経済全体の枠組みが変わっていく中で、地域が地盤沈下してくる現実に対する社会的な問題意識の表れであり、同時に学問として地域性を大切にしてきた地理学の立場から、内在的な問題意識として言わざるを得なかったのかなと感じます。

一言だけ、いちばん肝心なのは、地域という言葉の真髄には、中国の歴史にみるように、国家、権力というものがあり、その中で地域が意識されてきた。しかし、権力(国家)対被権力(地域)という構図で理解すべきことかということ、必ずしも決してそうではないのではないかという気がします。湯澤先生に非常にしっかりとした枠組みを作っていただき、それにどういう風に合わせて行けるのかな、と考えた時に、やはり「外側」、あるいは「上」からということではなく、「内側」からみるということに地域を見る時の原点があって、その中で資源論をどう展開するのか、ということが大事なんだろうと思うのです。内側からみるということは、逆に言うと、全体をどうとらえるかによって、見方・見え方は当然異なってくるわけです。アプリオリに地域という言葉(枠)があって、そこ

から資源を議論するのはなかなか難しいのではないかと。たとえば、今、環境問題が色々出てきているけれども、地域資源というかたちで内側から見て行くと、いろいろな提案が私はできると思うのです。

もう1つ、先生方が発表されたことで素晴らしいなと思ったのは、人間はそれぞれの所で時代感覚のもとで生きていて、その結果が他にはないようなものを生み出してきている例がある。そのこの部分というのは、すごく大事で、そういうところを地域資源としてとらえると、応用論としても意味を持つてくると思います。現場が動いている、現場が先なんだというのは、そのこの部分だと思うのですが、そのことと、本質的なこと、全体が変わる中で内側がどう変わってくるのか、ということをきちんととらえていくこと、その両輪が必要なのだと感じます。

野間：今回の話題の中では、今出てきましたように、地域というものを、いわゆる資源論とは違った点から見る視点、あるいは内発的な発展を意識したことだと思うのですが、もう一方では、最初のセッションでありましたように、地域というものは、ただ単に自分たちだけで自立しているのではなくて、国家や権力との関わりの文脈の中でも考えていかなければならないという。これはむしろ、近年の資源論のなかでは言われていることだと思います。そういう点では、米家先生が、日本の林政学あるいは林学と、農民とのせめぎ合いというものを近代の草地で議論されたと思います。米家先生の方からご意見がありましたらお願いします。

米家：溝口先生がコメントの中で、資源というのは、資源を使いたい側の言葉であるとおっしゃられましたが、まったく同感に思っております。それまで活用されていないものを、あらためて掘り起こしていきたい、強く言うと、それを取り上げて自分の物にした、そういうアクションと関わってくるのが

資源という言葉で、概念というよりは「言説」だと私は一貫して感じております。その意味で、国家スケールと資源という言葉が馴染みやすいというのはよくわかるわけです。そこに地域という言葉が付くのは、非常に矛盾していると言いますか、国家が持つべき資源に地域というスケールが付いて、国家が扱うべき資源というその枠組み自体をひっくり返そうとするような力を持っている言葉なのだろうと思うわけです。ですから、それをあえて使っていくということは、それなりに戦略があつてのことでしょう。資源という言葉を使っていなくても、利用している方にとっては、それは自ずから資源なのですが、そこをあえて「資源」と言い直していくことで、ある意味生々しいアクションと関わってくるような、資源の奪い合いを物語るキーワードになると、シンポジウム全体を通じて再確認できたように思います。

野間：今回鉱物資源というものを報告されたイメージは、いわゆる大鉱山ではなくて、地元と鉱物が関わったという視点での話題提起だったと思います。もし原田先生の方からご意見がありましたら、お願いします。

原田：私は今回大鉱山を取り上げなかったのは、地域というものを語る場合、大鉱山ですとどの範囲を相手にしたらよいのかということが非常に問題でして、たまたま今回取り上げた所は両方とも極めて狭い範囲で関わりがすんでいたというものです。例えば佐渡や石見を取り上げますと、関係範囲が非常に広くなりまして、鉱山の山元というだけではなく、コメントいただいたような大鉱山の鉱山町というような話など、話題が広がりますので、今回は地元の狭い範囲で解決できる場所を選んだつもりでおります。

先ほどから資源は利用しよう、活用しようと思って初めて資源になるという話題になっておりますけれども、鉱物資源がある地元の人は、それを資源としては全く使わない人た

ちなんですよね。鉱物資源自体は私の報告で申し上げましたように、貨幣の地金になったり、外国に輸出されたり、自分と関わりのないところで使われているものであって、あえて言えば、鉱物資源の開発が行われるという事象を利用しているというところがあります。利用する側は、必ず外からやってくる人であったり、権力者であったりするわけです。言ってみれば、地域にはそういう人たちと対峙してきた歴史というものがあるのではないか、ということ漠然と考えております。ずっと歴史を辿っていくというよりは、今回は変化が大きいのではないかと思われる幕末から近代という時代を取り上げました。そういう変化をもっと鮮やかに皆さまにお示しして、議論の題材としていただければと思いましたが、非常に拙い話で肝心の具体的な話が途中になり、心苦しいところです。

野間：では、伊丹先生からもお願いいたします。

伊丹：私は歴史学といえば歴史学なのですが、正確に言うと、農業経済学の農業史の側にいる人間です。そういった立場からすると、地域という言葉はむしろ普通であると思えます。地域資源という言葉も農業経済学では80年代ぐらいから使われているかと思えます。ですから、今回のシンポジウムの「地域」という言葉にはあまり違和感がない。あるいは農業経済の分野ということもありますし、橋本先生や湯澤先生からもご説明があったように、歴史学のほうでも、そういう単位はあると思えます。ただ、「資源」という概念はやはり農業経済学でも使うけれどもあま

りきちんと定義して使われているという印象はないと思います。むしろ地理学の先生方のこれまでのご報告やご議論やコメントのやりとりを聞いて、そういった概念を今後、はっきりと明確にしていかなければならないと感じたと思います。地理学のほうではそういった議論の蓄積が以前からあると聞いておりますけれども、農業経済学の分野、歴史学の分野でも、その概念を彫琢して、磨いていかなければならないと強く思いました。

野間：最後、まとめになると思うのですが、なかなか今回は発表者の分野も、時間的な軸も現代に近いところから近世、あるいは古代・中世まで遡って、広範な時空間に展開しています。そういう中で、今日出てきた中で言うと、地域資源というものが「有用性」あるいは「内発性」に関わって出てきた言葉であるという点が、共通の理解になってきたかと思えます。それが言説として色々な「政治性」も負いながら、今後考えていく時に、単なる実体としてだけでなく、言説として現れてくる時に、どう関わっていくか、そういう点も今後の課題だと思います。

来年度は、これに関する一般研究発表を募るという形になっております。会誌としては特集号になります。まだ曖昧模糊としたところもありますが、ぜひ、地域資源というものの研究と理論的な進化を発表の中に盛り込んでいただいて、積極的にご発表いただければ幸いです。ということで、このシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。長時間、ご静聴ありがとうございました。

(文責：湯澤)